＜書評＞

金　玹辰　著『地理カリキュラムの国際比較研究 ―地理的探究に基づく学習の視点から―』

宮　崎　沙　織*

1．本書の概要

本書は，筆者である金氏が2010年4月に筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻に提出した博士学位論文「「地理的探究に基づく学習」を促す地理カリキュラムの構成に関する研究：米国・英国・豪州の比較を中心に」をもとに刊行された。研究の目的としては，「地理的探究に基づく学習の理論的考察とともに，米国・英国・豪州の代表的なカリキュラムおよび教材を分析することにより，その展開過程の特質と相互関連を明らかに」(218頁）することだとしている。また本書は，タイトルにもある通り，地理的探究に着目し，米国・英国・豪州の国際比較研究を行ったところに特色がある。

章構成は，序章と終章を除き，以下の第1章から第5章である。

第1章　地理的探究に基づく学習に関する理論的考察

第2章　米国における地理的探究に基づく学習の展開

第3章　英国における地理的探究に基づく学習の展開

第4章　豪州における地理的探究に基づく学習の展開

第5章　地理的探究に基づく学習に関する世界的傾向と意義

第1章では，地理学の潮流の変化と地理教育との関係を検討し，地理的探究に基づく学習の理論的考察を行っている。ここでは，地理的探究に基づく学習が，1960年代の教育の現代化において導入された「探究学習」から，人間主義的・批判主義的アプローチ，構成主義的アプローチの影響を受け，概念で説明する概念知・習得した知識を適用する方法知・参加する実践知という3つの性格を持ったことを述べている。さらに，地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムの条件として，地理的概念（内容），学習のプロセス（方法），地理的問い（状況）を挙げ，個別の自然的・社会的な事象に対して，地理的問いを発し，その問いの解決過程が，地理的探究であることを示した。

第2章から第4章では，1960年代以降の米国・英国・豪州の地理教育カリキュラムおよび教材の分析を通して3国の特徴を明らかにしている。米国については，『地理教育ガイドライン』(1984年）の5大テーマに代表されるような地理的な概念習得を目指す概念知が重視される傾向にあったことを指摘している。英国では，伝統的な系統地理の影響から地理的知識やスキルを活用する手順を重視する方法知としての地理的探究が強調されてきたことを明らかにしている。豪州では，地理教師が地理教育を主導したことで内容と方法の一体化を考えやすく，価値判断・行動という実践知を強調する地理的探究に基づく学習が展開されたことを明らかにしている。

第5章では，3国の共通性と相互関連を検討することを通し，地理的探究に基づく学習を促す地理カリキュラムの意義を考察している。3国に共通することは，地理的探究が，網羅的な地誌学習を克服するために導入され，1980年代に定着し，その成果が1992年の「地理教育国際憲章」に反映されたことである。また，3国間に

*群馬大学

は，活発な人的ネットワークがあったこと，そして意見交換の場としてIGU・CGE（国際地理学連合・地理教育委員会）があったことを明らかにしている。以上のことを通し，第5章では，第1章で明らかにした地理的探究の理論的考察をもとに，第2～4章で示した米国・英国・豪州の傾向を踏まえ，1990年代以降の地理的探究に基づく学習が概念知・方法知・実践知を備え進められていることを論じている。そして，地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムは，「様々な課題に対して地理的な観点からその解決策を探す，すなわち地理的思考を身につけることが可能となる」（216頁）と結論づけている。

2. 意義と課題

評者は，本書の意義を2点提示したい。

1点目は，地理教育における米国・英国・豪州の各動向を明瞭に論述した点である。これまで，世界各国の地理教育の動向を論ずる研究は，数多くなされてきた。そのような中で本書は，「地理的探究に基づく学習」を通して，各国のつながりや1960年代以降の地理教育の世界的な動向を明確に描き出した。このことは，地理教育研究として大変意義深く，高く評価すべき点である。そして本書は今後地理教育に携わる研究者や教員志望の学生の必読書となることが期待できる。

2点目は，地理教育研究におけるIGU・CGEの機能と効果を明らかにした点である。第1章において，筆者は地理的探究に基づく学習の理論的な考察を，これまでの地理学の潮流と地理教育の関係，さらにはIGU・CGEによる地理教育国際憲章に求め論じている。さらに第5章において，米国・英国・豪州の研究者間の相互交流を含めた全体のつながりを提示している。そうしたことで筆者は，地理教育研究における国際交流の場であるIGU・CGEが，地理教育を発展させていくために一定の効果を上げてきたことを明らかにした。本書でも論じているが，IGU・CGEでは，「文化の多様性のための地理教育宣言」（2000年），「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言」（2007年）等を発表している。本書の成果より，これらのことも，今後の地理教育を考える上で，大切な要素となってくることが考えられる。

最後に，本書では，地理的探究に基づく学習の展開の一つとして，1990年代以降，実践知である価値判断・意思決定・行動が重視されてきていることも重要な点として述べられている。しかしながら，実践知における地理的な問いには，「どのように対処すべきか」「何をすべきか」等の例が示されているが，実践知がどの程度の参加を想定しているのか，地理的知識や技能を用いた行動とは何か，ということは不分明であった。本書内参考文献の引用箇所において「ポリティカル・リテラシー育成に貢献できること」（130頁）や「意思決定において考慮すべき空間的選択は何か」（171頁）等と限定的に実践知について述べられているところもあるため，地理教育における市民性育成という観点からも，より詳細な検討が必要であろう。筆者の今後の研究に期待をしたい。

以上のような課題があるものの，本書は，地理的探究に基づく学習を考究することを通し，「なぜ地理を学ぶのか」，「地理的見方・考え方とは何か」という問いに一つの示唆を与えている。日本の今後の地理教育のあり方を考える上でも，ぜひご一読をお薦めしたい。

（学文社，2012年9月刊，245頁，3800円＋税）